13
3150
3

へ13
3150
3

瀟湘堂記

昔話稲妻表紙巻之三

江戸　山東京傳編

九　辻堂の危難

ひつて山三郎ハ銀杏の前とちおひ生駒山を越て。河内の国ふあち丑之介。東の襠竹林寺ちゝきあつりまで迯来りけるふ。追人ども明松をふりてして近〳〵とおひつきければ姫君ふあやまちあるんことをおそれ傍の辻堂のうちふおろしおさえ引返し。追人の大勢ふ向合て權戦はるが。追人ども山三郎が猛勢ふおそれ秋の木の葉の散ごとく。四方ふ乱れて迯去りぬ山三郎今ハ心安〳〵と辻堂ふ立てうれば。ハいふ銀杏の前ハおつるごと月の光りふよく己れば堂上の塵のあふ足のあとあり。扨ハ追人どもの計ひそ我戦ひをふ姫君と

奪去つるに疑なし姫君を奪れてなに面目にながらふべき心と
決し刀をとり既にしてかどく腹につきたてんとしたる折しも僕
の麻蔵総身朱に染てながら走来り此体をみていそぎおし
とゞめ大息つきて不破伴左衛門笹野三解藍蔵藻屑三平土子泥
助犬上鴈八等四人の者をかたらひ草履打の宿根により人なく
にて三郎左衛門を打たる子細を涙ながらに物語ければ山三郎大に驚き
且怒り且悲しみ涙滝のごとくこぼれおちて暫し詞もいでざりけり
良ありていひけるは今日はいかなる悪日ぞ。おん館の騒動といひ姫君
を奪はれしのみならず伴左衛門某を打んとて誤りて親人
と打たる事なれば其が手を下して親人を打たるも同然なり死も死なれ
ぬ今夜の仕義之一つには姫君をとりかへし奸臣等を亡し君

君はもり立て御家督とし。一つには伴左衛門等五人の者は打とりて
父の霊前に手向冥途の恨はらさせで忠孝の道全からず。
今は二つも三つも不しき命なるぞや。さるにても親人の亡骸はもとの
せめてかりの葬をせん。彼所へ案内せよ麻蔵とて立出んと
したる所に此辺の百姓等とおぼしく明松はさきにたて戸板のうへに
屍をのせ菰をかけてかつげて。これはよしありげなる武士方と
見ゆるが。むごらしく殺されたる事よ衣服大小懐中物提物など
その侭にあれば盗人の仕業にもあらじ。片時もはやく郡司に申し
きこへて我くがあやまりにならぬ様いそげくと口ぐちにいひて来る
を山三郎立より此方に心あたる事あれば其の死骸見せ給へと
のぞみ。菰はねてみれば。むざんや三郎左衛門身体すくなきず

まれ。腹腸よりて五臓六腑こぼれ出て。鮮血戸板ふるぐれきて。
山三郎ひと目みるよりて。悲難の涙ふもせずして。地上ふ嗔きたれ
伏て。麻呂百姓等ふむひ此屍ハ當國佐ニ木殿の侍内ふ三郎左衛門
といふ人なりて。されるハ則その子息なれバ此死骸ハ此方へ渡を乞し
必も汝等が越度ふあらぞといひきれバ百姓ども死骸の
衣服の紋所と。山三郎が衣服の紋所とおなじ〻三本傘なれて。
さてハ相違あれまじと安心し。郡司の前ふ持出んとてきて
支状さをさへ我くが仕合なりと納得し。死骸状渡して立ぬ。
かて山三郎あげきてかへらんことをとゝ麻呂ふあるの流水を
汲ませて屍状清め。後日改葬をなさ〻ばと
辻堂の板敷状ならのけて。床の下状深く堀屍を埋てもとのやくなし。

おき。香炉の灰をもて〻水を手向。本尊の石仏ふむひ南无宝珠
地蔵菩薩悪趣の苦患状救ま〻と念じ〻ふ。ふれも涙ハとゞまり
ど。此時三郎左衛門がおびたゞしかハ重代の左文字の刀二千五百貫
の折紙つきたる名作なりしが。せめてのかゝと取ぢら懐中物提物と
ともふ。麻呂ふ持しめられバ麻呂のひるハ弟猿二郎支仕を辞て
後河内の国ふ住ぶ一旦彼地ふおん越あゞこの処ハ三郎左衛門が
乗馬のつさんふ馳来て。山三郎が前ふ頭状たれて涙を流しなれバ。
山三郎その為体とゝて胸ふきゞり。汝親人の秘蔵不ごあり我居
所をたゞひ来て愁腸の体人ふもまさりとゝ髪乱とゝさ
撫状のひるハ昔呉の孫堅董卓と戦て利を失ひ馬より落て
草中ふ臥。衆軍分散してその在所とゝゞ然ふ馬営中ふ

名古屋山三郎
銀杏前と扶て
舘とはきこう
姫は追人ゆ
うぐれて腹と
きゝんとゝゝと
ちり〳〵麻羌
三郎たゞつぐ
闇打ゆ
こゝと
告
名古屋山三郎
ちり〳〵麻羌

三郎たゞつぐ

迯て軍人とみちびき草中ふいくとりて孫堅が扶ちゆしと同
汝いそれゆもまきしぞとのひければ麻義も落涙し畜類もまた主
人の恩ゆ忘ひて。ゆくのごとく愁悲ふ。人と生れていかでか洪恩ゆ
忘ばくんや。伴尤陽門等。たとへ天ふ道ありて登て地ふ門あるとて入
とも某が一念の誠ゆ以て尋出し。御本懐ゆとげさせ申ばしと。
切の馬の卒頭をあでまゝ。人と畜類のなぐさいあれども。我も汝も
傷輩ふて主君の恩ゆ忘ふ。我ハ汝ふハおとりしぞ。
飢ハせめて飢たゞんとて。あらゆの草をとりて与へ水ゆひるどしていさ
ゆとけて山三郎幸の父が片刃の此馬。それふ乗じて落ゆんと
いひてひゝとのれば麻義あらゆの枯枝とひろひて火打袋ゆ
うと出し。火と點じて明松ゆ。前ふ立て生駒山ふ登ゆて名ふ知る

暗く峠の難所も切ゆく案内ゆ為ゆたゞもべ口綱ゆ引て馬ゆ
うちびきて。河内の國へいそぎ迯ゆたゞ

十　夢幻の落葉

それハさて置ふまゝ。六字南無右衆門ハ佐木の館の支気ぢうハ
しく。旅商人ふ刃ゆ扮し。一荷の荷物ゆかつぎ。人目をぬすみ笠ふ
ぐゝと面ゆおかひて。大和の國ふいりけるが。宿ゆもとめかねて夜ふ
入額田部村をとゞまる。柏木の森の辺をとゝ通ゆ。木蔭ふ人の
うめく声。いと苦しげふきこえけゆ。提灯ゆさしはけ
えるふ。はあてけるる女の。切麻子の小袖の裾ゆたくかげ。たゞきき
ひけ。けゞしく打扮たるが。黒髪ゆ乱し。数所痛手をおひ鮮
血ふさたうるぐれく。總身朱ふ染ゆ。伏ゆ息もたえ〳〵。

傍ふあり長刀とつへれば。銀の蛭巻して。梨地ふ倚懸目結の紋をちら
しふ蒔ぬ。これ佐〻木家の紋なれば。益いぶかり。女房抱き起して顔を
見るべこいふ月若の乳母栢木なるが。ふむ右衆門大ふ驚きたく八
の気ほけ薬なども与へて。さるぐふ介抱されば。やうく目ふひらき。おへ
ふ佐〻良三八郎ぞのふへあ〻どやといふ。ふむ右衆門いへく。おんふいう
なる夏ふて。ひく痛手とおひ此所ふへたるふれ居るふぞ。その由ふくしく
語へとひくといふ栢木苦しく息ふつき。今宵おん館の騒動なるぐの夏
ふく姫君若君のおん命危きふよって。姫君ハ名護屋山三郎守護し
ておち行。妾ハ若君ふ扶ヤして立のけるふ途中ふく追人の大勢ふ
こへとかこまれ。ひどく若君ふ奪ふられんと。なるる由ふ命かぎりふ
戦ひ。追人を斬散して。若君の御方恙なく。此まぐハ立洛

のびけるが。心ハ矢猛ふ逸れども。あるこの深手ふ歩行かるへ。ふ
倒れて夢中ふなるて。おん方の介抱ふあるてしも。なるどおん方先年
藤波ふ殺して立のがれし夏。実ハ若殿放埒の根ふたるへと忠義の
為ふ世ふれしは。おん内方礒菜ぞ。その消息を。始めて。なるて。かけて
姫君若君ふも。おん方の誠心ふきこえあげて。折もあるべ飯粢をとらひ
ひるく此度の大変なるなるる。なるくおん方ふあひたるハ。なるぐ
君の御運尽ざる所ふ妾此深手ふくへとそも。なるくも命なれば何とぞ
おん方若君ふ必ずひひ。再世ふいどしまるくせむるれしと泣くくものがる
なるもひと苦しけ。かむ右衆門委細ふ聞く十分ふ察ちき。なるて若君
ハいどくふおのるとぞと問へて。栢木あるるふ。なるくふ。月若のおさるとそ
仰天し。かるくりとおち入て所の名さへ栢木の杢の雫ときえうせぬ。かる

月若の乳母
柏木若君を
守護して
追人とたゝかひて
深手を
おふ
めのとの一味

折しも。茂林のうちよりて。追人の人数若君の口ふ猿轡ふ
かませ。ふ脇ふかいこまして走り出。やはく佐と良三八郎。汝長谷部雲
六といひ合せ百鰲の巻物ふ奪。藤波を害して逃去たる大罪人
とみそなはせたるハ天の与へ給ふ。若君ふ奪ハるゝふ汝を捕れハ。
両の手ふ美食を握るがゆゑ。とく〳〵手ふ法をみて。いなしめとうけ
よ。若手むひるどせば忽若君ふ殺さとぞ。返答いふとしたれハ。
かむ右傍門いそぐ〳〵。地上ふひざまづき。此所ハそなたの目ふ
かけしとハ某が運命の尽なり。いそぐ手むひいたすべき。いざとく縄と
かけられよといひて。手をほゞめれば。追人の人数ふちく〳〵ふさすがの三八
郎。覚悟の体殊勝なりそ。已ふ縄ふかゝるとなる油断ふ入ると
ま〳〵。かむ右傍門つと立上りて一人と蹋倒し。若君と奪ひ〳〵て

背後ふかゝひ。仁王だちふ立たるハ。こちよりハ形勢なり。追人の人数
これふ入そ。欺かれたる口ゆ。さよ。それ打それと呼ばるゝ力尖そ〳〵
て斬かけたるハ。かむ右傍門手ぞ〳〵く息杖ふ仕こなたるハ法ふ拔て相むひ
まはるもなく斬たるれば。追人の大勢敵しがく。春雨に打たる胡蝶の
ごとく。才法ふぞめてぞ逃去ぬ。かむ右傍門今心安〳〵と若君の前ふ
ひざまづ。ハ。人目法いとひゆゑ。此辺法立のく間。ゑ〳〵のわど。おん気ぞ
まはるハおいさんが。此うちふおん才法ものびてぞまるゝそ月若法荷物
のうちふ抱き入柏木が屋ハ。ゆるり近き流れふ沈めて水葬し。又も
追人の来ぬ間ふと足法ゆめて走り去丹波法ゆてゆゆ

十一 斷絃の琵琶

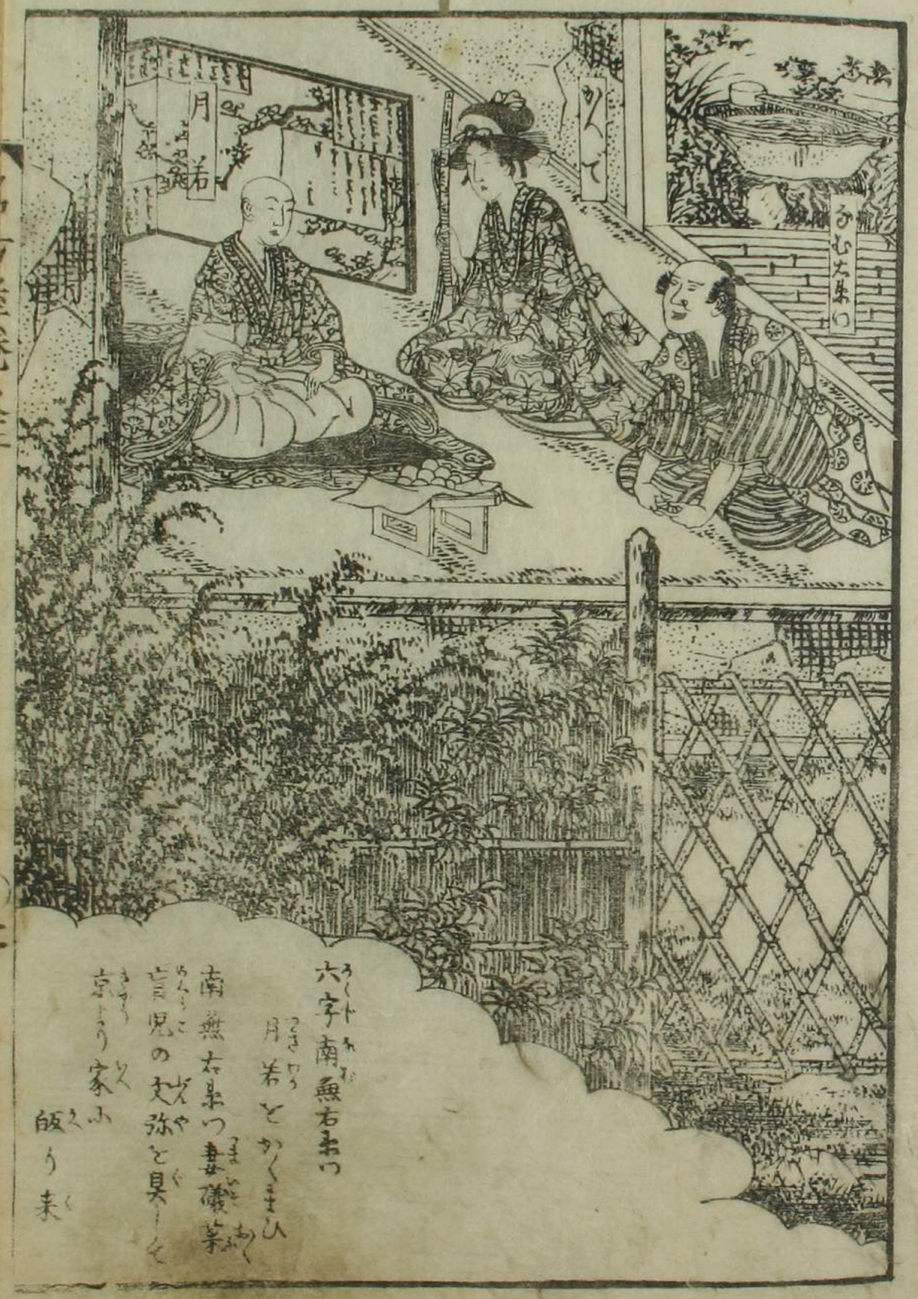
さても六字南無右傍門ハ若君法奪て我家ふ皈て。一間のうちに

ちのばせおき娘楓にも朝夕心ばかりもちひてかゝぼた。權月日を送るとは。一日若君ふたゝび気ぐるしさせやんこ。楓ふゝゝ行けてゆるかいまもれば煩ゝや月若へ世ふるうとしき生れるふ妖鼠の爲ふ髪の毛ことゝひ尽され。剃髪の姿となり。頭ふ似合ぬ振袖の綾の小袖の模様さへ。このたゞこの捨小舟薄縹の奴袴も涙の痕のたゝことあり。ゆるぎしげふ出るゝ。かむ右衛門楓ふ命じて柴の折戸成かゝめさせ若君を上坐ふ。ふとゝ成てゆしはい。狹き一間の地隠家。さぞあん気づかり。人目成ぬ。ゆゑ地ゑ成れば。せんとぞ。御先祖をたゞ成れば人王五十九代の帝。宇多天皇の御末ふて佐ゝ木成頼公の末孫と生れさせ玉ひ。あるこの人ふかゝ。ばれて金殿玉楼のうち ふ生立玉ひ錦の茵玉の床ふに一点の不足なく。あらぬ風ふとゝあらむ

地ゑ成るふ奸臣佞者の爲ふ世成せぐめられ。めゝ貪家ふたのでせ玉ひ。栗の飯椽の粥。ゆゝ。ふ地命成泥ぬぐゝ。蕨の地ぞろ紙ぶとゝ。夜の物さへ薄着ふて。壁ゆる月の燈火ふくゝ地ゑ成ぬ。ゆゝさまこいひくれば若君のゝゑひくゝ。汝が忠志過分ふゝ。我ゑ成いふふるともいとゝぐれども。唯気づかいきハ父母の地ゑ成ゝ。父上ハ御勘当の ゑ成ゝとるゝ。ひて后いゝくいゝゝる呼ふ地ゑ成ゝ。母上ハちゝぐゝ山三郎ふ扶られて落玉ひゝ。ゝれも御在所知れざるは。追人ふ捕れ成ゝ知るべゝふぞ。ある意ゝの文上やゝ。ゝゝしの母人やゝて。ものび涙に山せびゝ。ゝゝ。かむ右衛門楓も。地心根を推量ゝて。ゝもふ扶成ぬ成ゝ。ゝゝ折ゝも外の方ふ人の足音ひゝ成れば。かむ右衛門楓ふ目ぐハゝて。ゝて若君成一間ふかゝし。さあゝゝ体ゝそ居たゝ。人の親のゝゝハ闇ふ

あくまでも。盲目となりし我子を。道に迷ふる杖小笠旅ふやつれ
女房の琵琶ふ背上ふとたゝ〜。盲児の手ふ引て四年ぶりて我家の
軒の垣衣の露ふ分き草踏分て柴折戸ふとくと打たゝけば。たをやぐ
て。ふむ右衛門戸ふひらきて。ぐれば妻の儀菜子の文弥京ふ上り
体るれば。こハ〜ひ〜ひ〜ぶりとて。まづ〜ともちひてうちふのつ。楓ふや
母の声とゆ〜ほけて。いそ〜ぐ〜〜く走て出夫婦兄弟四人の者ひと
ぶりとの對面ふ。たぐひの喜びふ。ぶ〜〜ぶ。楓ハ盥ふ湯ふたゝへ。母の
裏脚草鞋とゝ。足をそゝぐ。たゞとゝれば今ふかゝる孝行やと。
うれ〜さに堪ざりけり。さて礒菜夫ふむ〜ひ〜ひ〜ことを同ことのあ〜
ふく。何〜〜語つてぐらんや。且やとべきハ文弥支。幼年ゆゑ藝
道ふ心ふ入ぶ。片時もはなたぬ。ぶ〜〜ぶ。おのゞ〜妙ふ得て。師匠沢角

検校どのも。たぐひまれなる器用者と賞美〜。玉ひ。紫檀の甲の
琵琶一面ふ。秘曲の免状ふそへて。むかとゆれば。つふハ彼が一曲ふきゝ母ふ
〜く。ニうふハ楓が新もゝ〜ふ。しくさとゞろふ古郷がゆ。しく文弥もまた
ゆん〜ゆ姉ふ意〜ゆ。ゆとふハ夏俄ふ立師匠ふ志ゞ〜のいとふ。ふ乞まゝと
下りゆひぬと。ものがゝれば。ふむ右衛門ひとゝ〜喜び。むとゞの對面無事の
新ゝて安堵ふつゝ。藝道も上達ゝ。志ゞ〜ゆ。さても能生立〜ふつ
たぐふぐ〜りふ丈高う。ゆ〜りけるぞとて。餘念ふく文弥が頭ふ撫ぶ〜いふ文
弥ハ恭〜く両手ふつゝき父上御安体の様子とうゆ〜ひ。ゆ〜ひ。堪ぶ〜ぶ
おとゝ〜ゆふ相のぶる。楓ハ〜〜十六才姿ゆ〜ゆ〜美麗ふて。手縫ふ糸
の振袖も綾羅ふまぶ〜風情ふるが。母のそばふちかくふ。長ぐの御在
京さぞ定苦労とあさ〜ゆ。ぶ〜〜ぶ。気ぶ〜ぶ〜せ〜ぶ。恙ふ体ふて。


月若
みむ女集り
六字南無右ゑつ
月若とかくまひ
南無右ゑつ妻儀菜
盲児の丈弥を見ーそ
京より家ふ
飯う来

いそか

あり〳〵心やすまるもしとのひろれば。あり〳〵我苦労ゝ、おことゞ支妖蛇も人
ふまらぬよし。其方以て父上ふ孝行尽さと辛労ゆさぞうゝこと推量し。
わられて居ても片時も。わとろて支いるうゝぞや縫物髪もうく仕
おやえはるよし。父上の消息みてそく同ぬそう〳〵ろむろせ髪のかく
つ成つゝくえまへゝさてもうはたくゝうゝくできゝぞ此きろものもおこ
こゞ縫ゝう。あつぷれの手ぎんぞ。廣き都のうちふまもゝ。おことゞ如き娘
ハまれと。ろへばいろで妖蛇の支。おもひいぶゝて不便ありと何ふはけて
も子成おや人親の心ぞやるせ。良わとてゐむ右馬門佐木の舘
の騒動。柏木ゞ忠死の子細。若君成かくまひあく支の始末成語と
きゝせけば。礒菜かどろ不慮の御難義いさゝゝさゝとて法られば。
かむ右馬門。いうゝごりふてもゆゝぬ支。そちも文弥も久しぶりあて

若君ふ。ゆゝ目ろくはろまられそて。楓成はけて奥の一間ふいごゐせ。
ゝろ木の念珠はゐゞろて。例の念仏とゝゑはゝ。ろろふ時刻成うは
ゝけり。日あゝも漸こかゝて。比京下りの古書画の商人いそがゝしゞふ
ゝろゝと来ゝ。前の日ろせまゝしる。金岡ゞ百鱧の繪巻物外ふ望人
いできゝゝ。唯今價をお法しゝるければ望の方へやれべろゞ。いで
ゆゞとやんとゝ。あむ右馬門打同て。えあゐろゝ火急ろゝ。ゆて三日ま
ちゐられかゝとゝくべ商人頭とおゝふゝ。某も旅ゞけの支ゝられば三日ゐど
へまゝゝれやゝゞ。ゝろゝば今夜三更の時まゝまちゝゝん。その期ゞゝとゞ
れば。ろゞちふゆの方へ賣はろへゝゆゝとて。詞成つゞひて立敢ゝ。おどろく外の
方ふ人声ゝて足音ひゞきければ何支ゝるゝめといゞろる間もなく。村長ふ案
内させて。捕手の輩組子ども。どやゝと入来ゝ。組子の頭黒星眼平とゝふ

者首捕ゆ小脇ふたづさへ。声のらるふいひるる。汝佐々良三八郎今の名ハ六字南無右衛門とやんいるる。月若ぞめゆくまひおく支。荘進の者ありて。大殿のおん耳ふいらし。首打てまゐれ。この表命るる。汝自打て渡とたれや。某亦ふ打べきや。返答いふこゝろぬ。おむ右衛門胸そろくこいくどもさあゆ体ゆる。若君ゆくまひやせ。なんぞ。何者ゆしるる。夢ふもちぐる支ゆこそ。そくそふたていひるれば眼平ゆりくこと打爰汝ゆくまひゆく支明白ゆる。おそゆ。此のゆ家ゆ踏破つそ。家さぶしなん。又尋常ふ首打て渡さば。その功ふり。汝ゆ日悪ハゆるとたゆ。返答ふり。汝もそもふゆゆるるそ。藤波ゆ殺し。巻物と奪たる。日悪とたゆとたゆ。りだしをゆけてせめられべさそゆあひ右衛門ゆ。ゆ〳〵當惑の体

るるし。魂ふえていひけるさゆゆ支のゆふるうふはせんそゆ。ゆくふ。若君のゆん首打て渡。あて御最期の念仏とまゐめやとその間ゆの御猶豫ゆさられしといへば。眼平うゆぼた得心のうふ。ふゆの間ゆまちられんゆゆ今宵三更の時打鐘を號として。首ふりるふむふんぞれべゆゆゆど詞たゆふたるゆゆ。且それまでハ村長ゆふまちそん。首捕それへうけるゆそ。相渡し。人数を引具し。ゆるとゆ。跡ふハひるふむ右衛門。手をこゆぬき頭ゆたれて。ふゆ思案ふられるゆ。良ありそいひるハ巻物の價百両こふ大金るれば。そそ調べた手段ハるれゆ一すのびれば。るるのびるこふ常言ものれべ。ゆ思案もあんるる。今日聖こいひのゆ。それるるも危急るるハ若君の御身るる。今宵ふ

せめて二ツの難義臥竜楠氏の智謀ありとものがれ道調をのべ
あらざりしに。藤浪が所縁の者に打れんと。かねて云ひし命なれ
ども。かゝるきハ是非もなし。若君が肩まわらせのがれてなけれ
のがれかねて若がらへざるその時ハ御腹をとらしめ申し斬死するより
外ハなしと。ひそかにさだむ心のうちにうかゞひて旧葛篭のうちより。
一腰が取出し。行灯提て奥の一間に立いりんと。破れ紙门をさと
あくれバ盲児の文弥財布のうちよりあまたの小判が取いだ
して手探りにかぞへ居たるが紙门のあく音におどろき手ざわく
背後にかくしたるを。なむ右衛门目ざとく見付ていぶかりいひ
けるハいかに文弥。それバ餘程の金が持たるが。いかなる由にて其の
金持しぞ。云へ出して見せよといふ文弥いそくこれハ師匠より

あづかりたる金なりけれバ親人なりとも見せずにといはれぞ。なむ右衛门。
師匠なりとても幼年の汝に。大金をあづけおくべきいはれなし。
いかなるゆゑにてあづかりしと問れて文弥口ごもり。いやこれハ途中
にて拾ひし金なり。あづかりしにハあらずと詞のあとさきそろはねば。
なむ右衛门ますますあやしく。途中にてひろひしものが。かくし置く道
にあらず。いかにも拾ひたるぞ實正ならバとひつめられてせんかたなく。
まことハ此金あづかりも拾ひもせず道中の旅店にて泊り合せし旅人の
金が盗とりたるにて候と聞てなむ右衛门あきれはてゝ怒りしのび
はらくと引ならし。なんといふぞ。そちハまことに真實か。元来なんぢ
孝子にてさあり。非道をおこなふとハいづれ性質にあらざるを今の
までいひしが。在京のわづかの間にさばかり心のかはるものか。これよく

きけバ。あかるき所ニ王法あつて。くらき所にハ神霊ありて五戒
のうち。わけても偸盗をいましめて。たとへ塵一すぢでも盗を
なして。豈しく罰をまぬかれんや。けしからぬ心底やあさましき所存
やとて左の手にて首を持ち右のこぶしをあげて頭をのぞき
つゞけ打に打ながら。且怒且悲しみ。あつき涙をおとしつゝやゝふるへ
しく嘆きながらも心もみだれんかと。親の慈悲こそありがたけれ。
文弥ハやがて越上りてあざ笑ひていひけるハ。貧乏者の子とうまれ。
正直にかまへてハとても出世ハなるまじ。此金にて官をもとめれバ一生ハ
安楽なり。さべなるを呵まひそと。きかばきくほどふてくされバ歯をくひ
しばりて声をあらゝげ。大膽不敵の今のことばさらく子とハおもも
われど。天魔波旬の所行なり。親子の恩愛これまでなり。

七生までの勘當ぞといひつゝもいでゆけとて足をあげて踢ゑんとせバ。
文弥ハ財布を懐中し。勘當うくれバ親でなし子にあらねバ長居ハ
无益とうそぶきつゝ。あゝらと探りていでんとするをかむ右衛門怒心にたえ
のびあがつて走よりて又踢たりけれバ。おきあがつて又悪口さ悪口されバ
なほ踢たりける。踢たりせバ益悪口やまず。かむ右衛門いよく怒
頭肚の用捨なく踏にじりてふみたゝせバ文弥ハ片息になりながら
なほも悪口はやまざれバ。かむ右衛門怒気天にさかのぼりてかたな
とらんとす。援手もつけさせず肩尖四五寸きりつけれバ。呀と一声たおれ
ぎりて。うしろにかふしたおれたてたゝかけてきりんとせしが。恩愛
千すぢの葛の緒。足にまきひて背後のかくぢきもどさるゝ
こゝちするを。ひきりて又うちあぐる剣の下に妻いそ葉えより出

南無右馬つ
怒るふたりを
一子文弥と
手うち打よ
きりつくる

六字なむあみだつ
いとる

やれ志び〳〵ときちまいふことあらんとぞ申れべ。おむ右衛門いやらぶものあり〳〵ふ生おりて。罪はくてせんすりんぺ一そひふ手ふかくらぶ。親の為悲ぞといひつて。いそ菜はおーのけつきのけそ。おそきうつけんと立まいり。いそ菜ハ夫の手ふとぶそ。その身はちづふひきあど息はほく〳〵ものの金ハ盗物ふいひんど。まことハ娘楓ガ身の代ふそ沙と〳〵ぶも。ふむ右衛門合点ぶど。妖蛇ふとゑれ佐輪ふ娘は何ぞ大金出して申べき。ふんぢもともふいつるとそふ〳〵てくれべ。いそ菜奥の方ふ手ふ申むひやく娘こそ来て父上ふおとづれ心底ものがくれ。ふやく〳〵とーぶ〳〵れば娘楓一声答てかけいでしガ、文弥がきくれ〳〵体はつて。むせやうとてぞたつれ申。いそ菜文弥を抱かへ。ひしうめんが父上ふ本心はやるうち。こくへてくれとい

うつて楓ふひしひ。ひかるーはいふぶれども。委細のまけを父上に。くく告ふといそれてやりく就はあげ。ふむ右衛門おうちむひ。御不審ハ理ふり。前の日父上おんものがるふ。ひてたづねる百姫の巻物。ひのけぞ京ぐらの商人持参せしガ。その商人は捕（出所とたづさぶ盗人の在所も知れ。巻物も手ふ入道理とゑ〳〵ども。かるしさハ日蔭の糸。あ〳〵ふ夏はたじがし。さうとそ價ハ百両とい大金ふれべ。そも我手ふいつとがし。我手ふいつれべ未代盗賊の汚名はとぐ夏あ〳〵ぞ。金ぞくふそこれまでぶ〳〵武士道はとそ。先祖の名までとけぞとこ。ふくべく無念ふり。口ぶさふとそ男ふきふ。ふひ〳〵ガ骨ふ。ふそい〳〵ぐ何とぞ金ふのくてあげんと。ゑど外に仕かるも。幸京都五條坂の傾城屋條村八幡の門前ふ旅宿〳〵

て居と同。ひそうふまありて。此才に百両に買くれしをたのしみ。
やうふうけがひしが。妖蛇のいそれと。同とその侭破談に成しが金ゆえ
そよ心一圖に我才の片輪に心ほそがるとて支しとぞうそうそひつ。そこ
ぐ出ぶんとまろふ。捨る神あれば拾くる神もありとて常言の
ごとく。今ひとりの年ゆきある傾城屋がやとへ。これまで蛇にひの女
さるぐあるが。實の因果にてさることあるべしく殊更生れつきもの
れば紀川原にてそせもあふせばあそびふとるとりかつて利得おかん。
もしそせもあふる心あらば。五年に百両に買かうとのこと。
そせもあへかろ。なるべく生皮とそがれ生膽にてうくとも百両の金にて
の父上の汚名にさとうげば露ぞうもいとふべくもぞことき面にさとも
うもうき川竹のあがれとて。永代けがを出まじあり。諸人にたぐと

きしるべ。ゆるして罪障のきえうせんことを心に決し。
それにきそもどりが父上にはいひだしかねて居にる。今日にぞも
母さまのおんとり代辛ひとし妾が心底とうちあけされば裏口より
ちもちひいでかーこれ母さまの手形とそえて證書に渡し。
百両の金にうけとり。今夜のうちに都へ旅立ぐに約して。ゆりし
折々捕手の騒動若君の御急難母さまとものがそ唯のきれ
てとりは不審にはるせ。ひそそこ。文弥が持しの金は妾が才の代に
ちがひなくはと泣くのるあぞ。かし右は門一の不審にそれたれども。
それは文弥が口ごとう。盗ーこそるのといひ。血刀にるがとて。ひく
る。いそ菜のりていひけるは若君の法急難とそくことひとーく。文弥を
はん才がりとそひつきしが。忠義に凝たる坊才なれども。ことに親

子の愛着ぞ。其心もかくれまいと。文弥にいひつけ。父上の気
質癖なりも。早がつ事をきらひまへば。此金を盗しといひ悪口せ
ば怒に乗じて恩愛の紲をたち。手打しまいは必定と。ゆるぐ
なるふ迄じや。心ぐるしくもいひきけたればなとやうに聞こゆれど某
宿世の因果にて盲目となりければ。たとへ主君の御大事とても
此も戦場のえらばれるがごとく武士の子とうまれたるかひなしと。
日来なげきし。然るに若君のおん身がはりとなるは。戦場のお
死も同然。ねがうてもなき幸之さいはひ。さりながらたとへ計ふもあれ親
にむかひて悪口盗せしなどは。勿体なくて申しがたし。それゆへかし
まへといひけるゆゑ。最のことなれども。さるにても父子の愛念と
絶ことあさはかど。何事も。みな忠義の為ぞとぞ。やうやく得心させ

けるに。げにもよくこそいひしぞ。われはゆへされなばなるまじされ
ばどこそのがけにて。おん身の様子をうかがひしに。若君をとも
なひてのがれ出ぞ。かなはぬ時はきつと死ぬ覚悟の体に見へたれども。
村の口ぐち山道まで捕手の人数がとり巻居るよし聞えければとても
のがるゝ道はなし。さるを首となり瞼をふさぎなば盲目目あきの差
別もあるまじ。たゞ眼平若君のおん顔はつく知とも忠義の心を以て
あざむかばやはり仕損じはあるまじ。大丈夫のおん身はさし恩愛にひか
されて。おぼつかなしとそなたの愚智な女の心といひ朝夕をかれぞ
手にかけてこれまでに育あげたるいとし子を。またそめで殺さうと
胸のうち。ご推量なされし。そのこなたで娘楓が。よべしのわれは
いひながら。世の中の親の情は我子の片輪をどこまでもかくして

ものが常なるふ諸人ふ新氏さらさせて丹波の国の恩果娘と。
のちくまでもたぐ氏殘さと不便さよ妾が身をもて十年ゞ若
くべ此身氏賣ても娘にうき目ハ見せじものをとこどきたてく兄弟
ふたりの手をとらつ夫ふおられ氏そゝせじこたへたのびたる涙
瞼の堤をゆきうてめふれかつるぞことわりなる。かむ右馬門始終を
聞くゝぶひそるれバ百倍かなしく。鉄石のごと氏心ふも肝ふやきがゆさて
そひ五臓六腑悩乱ゝ。ゝゝ詞もいでざりしがやゝそいひるハ。
文弥支若君ゝ同年こいひ剃髪の姿こいひ新かちも似たる
ものゝ坊ん新かりとふひたていえゝ。ゝゝ何いくも盲目ふて用ふたるぞ
と一畳ふそひて死首のまづ氏ふ氏盲目めあ氏のたぞそなき所
ふハ目ぞりも心ゆるざ見。抓も容ハとゞれたれども片輪なれバ

ものうもるゝぞ。嗚呼ふそうもの子ども八持ゝ。親の恩果ゞ子に
報忠義の用ふたぐる支ゝそ。殘念ふそひゝがおそ氏そゝじめ兄弟の
子どもら。たぐひまれるゝ心底ふ。持ぐそめの八子ゝるぞこいひて涙こ血こ
相和ゝて滝のごとく流ゝけるこ。文弥八母の介抱ふてやりくこ起
るゝ不ゝ。おとゝ。ゝふ手氏ゆたていひるハ渇ゝても盗泉の水を
飲ぶこゝんきくもの氏。母ふ人のゝハせこいのひるゝ。盗ぬ金氏盗ー
こ。親をいうゝる詞の罪坊ん思しふぐきれし果報ゆゝるゝて生れ
もゆるめ盲目こゝりぬれバ。せめて藝道をとゝげゝ父母老後の
心氏安め。片輪ふ奴ふ法不便氏ふゝ。ゝひ法養育ぐきれ。大恩と
むくんものこそれたのゝふ四年こゝふ精神氏こゝせゝが此支若君
に一命氏たてまつり。姉うも身氏賣ゝバ此志八さぞ心ゆるくゝ不さ

まこと生かれ死かれと兄弟二人ふかくれども。死へ且は世を安く生て諸人ふ面目さらし父の汚名ぬぐはんと思ひしかども。姉うへの心底へ。又ふしぎなる孝行ふ此年来学びえ得し。琵琶の一手ふ父うへふ同せやさで死るのこと心残りふ思へ。ひく手ふ負て出ずるうらみぞれども。一曲ほうふまつり申ん。冥途の旅の出立土産ふ成ばかりとおもへされて。ぜん同ぐうれし母人さまその琵琶をうけとりふぞ。いそ菜法く琵琶をとりてあるふれば。ワぞふ年ハ十一才の盲児ゲ。縹木綿の肩あげふ血ゝ和たる痕口のいさましくて琵琶かきあふしいと苦ゝげふ声たて。平家をぞかたりける

さるあどふ。一の谷の軍やぶれしゝ武蔵の国の住人熊谷の次郎直實平家の公達たちけ舩ふのんとて。ぐぎうへのかうへおちぬれ給ん。あつぞれ給大将軍ふくゝ見ぐやとふひ。ふそ乃ふかうて。ぐぐふの。うへあ四ゐとる所ふ。そふねをぬ給ふ雇やうゝる直亟ふ萌黄薫の鎧着て。鍬形打たる甲の緒を志め。黄金作の太刀を佩紀。二十四さひうる。そうの矢おひ。頻藤弓りち。連銭聰ある馬ふ。金覆輪の鞍おいてのつりける者一騎。沖ある舩を目ふけ海へさつと打へ。五六たんだるとぞおもひかせる

とうたふ唱哥も声くもり。ひくてもふくてたゝうゝねぞさとう日来の手練こいひ。此世のあごりころふ。苦ゝ紀息をそげまをこゝ三重の甲をあげ。初重の乙ふ牧て。うゝひとゐたりければ大紘ふ嘈とゝて急雨のごとく。ふ絃ふ切こゝとして私語のごとく。昭君馬上ふ志へ

文弥手とおひ実い
月若の身代ふるゝん
見悟と本心とゝ
死出のおにゝやげ
なりとて平家と
六まふひちまつ
かんで

かゝる其色
いとも哀れ
ぶんや
いとふ

楽天客舟ふ閉ぢるふもとるやにまさりて哀るもおむ右衛門耳と
そべだて〻閉居たるが恩愛切るる難のうへふかるかなき調をきけ
ば皮肉もとるる〻ちり〻てこそ〻かすてぞ泣伏る磯菜枫もしろ
こもふ涙ふむせぶだりるる文弥いるふも声ふりたて
熊谷あるぐをちる〻とあぐいて。あれは覚ゆへいふもして
たちけまる〻せんとへ存ゆへども味方の軍兵うんのごとく
うち〻て。ものぐ〻まわ〻せれいじ。あへもおるぐうへ直実が
手にかけ。ありて。後の法孝養をもはるるるりれいんとや
ゆれば只何様ふもうり〻首をとれとぞのるるひるるる
ぐあるるりふいとを〻てのづくふかを立べ〻ともおるえど目も
くれ心もきえたて。前後ふ〻おぼえられども。さてもあぐき

ことあ〻れば。ちる〻首をぞかのそげる
こうたへ声さへ。ちぐひふちる。かどくたえん琵琶の緒ふかる血不
の痕口より。さとあぐれば。あふ苦しや。かるやうたふことかるひぐ〻
られすぐぞ。琵琶法おれ。堪ふ〻さへ一條の杖とたよりの暗冥道
死出の旅路へ殊更ふ黒闇地獄ふ迷行無目の餓鬼ふ生れ出て。
呵責ふうらん心定あ〻。それと不便ふおぼ〻とる〻。末期の水法
さうたるるに逆縁あ〻ぐ〻お手づ〻。香花と手向たるるれと我才のた
めの功徳ふへ他人の千僧供養ふうたるるふまさりれば。さるだふ。
親子ハ一世のちぎりとき〻ふ盲目のかる〻さへ父上母ふ〻へ千方年のか
齢まどぶて冥途へ〻ちと支ありふも。お歌法ふる支かるべ〻ふ
ぐ三世のわれ又あ〻ふとへあじとふ〻へべいるでかるべ〻ぐるとも父ふ〻へ

ぞふおやとぞといひて左ひたりて。ふむ右膝門ふこうとさぐり。ふ
ちと探りつ撫まはしつ。法苦労ふるあるいはれば。ふ
かるくどぞ思ひ思ひ。とくとくはん永悪ろく。寿去く。地へ
のきはまで孝心のふかい詞をきくふるふ。ふむ右膝門胸ふさぐり。主君の
御先途ふとぐけて后ハ藤波ぐ縁者ふたづ。恨この刃ふかりて死を
ぞ。ふかとその覚悟ふれば。ふへば蜉蝣の一期ふて翌をふもふこの刃
ふるふ夫ふとしもふくじて長生せふとふのひごとふと心ふ
ハふひふぐ。ロふハふのくどぐ過去の修因今生の現果ふふくふるけ
我ふるこのくのひて。とく涙ふむ思びけふ。礒菜 楓ふ人ハ文弥ぐ左右
ふふふとふふて。ふれぐ三世のつれふと声もおしまぐ法ければ文弥ハ
ふふうぐ者ふうちとさぐりぜめての支ふたぐ一目ふん彩とふて死たきこと

ぞ。盲目ふるのに。ハ何の因果ぞ。又今更にかれてふきて血ふ吐ぐり
法ふるぐ折しも空ふ時鳥一声ふるて過るふぞ死出のたよりふ
ふぐく苦痛ふ思ふうハ少もふやくふ。ふうくのふん手にかるふふくは。ふ西へ
むふひて合掌しふ。ふぐくく念仏をとふふ。ふぐくと催促しふ首をの
て。まちければ。ふむ右膝門子ふ。ふげまきれて。ふふ起しふ力を抜ぞめ
ゆぐそうふふ立まハふ。ふるぐ前ふ斬しハ怒の刀。今の刀ハ恩愛の切なる
ふひの剣ふれば手も抖ふ脚も軟ぎて。いづくふ剣ふ打じふもおぼえど
今同ふる琵琶の唱哥。熊谷の次郎ハ敵でふ。敦盛ふ打ふふ
ものふ。現在我子ふ斬ゆふひ。いふでふたふ。忍ぶきこと前後不覚の体ふ
時刻ふ経ふて仕損ドふ。ふれぐ忠死も水の泡とおふひきふふふ
足ふふしふつ。若我成佛十方世界念仏衆生摂取不捨面光

阿弥陀仏と声ならぬもにぞろりとこきれバむざんや首ハ前にまろびおち。
躯ハうしろにたふれたり。礒菜楓ハ太刀音と共にさけびて打ふし折しも
遠寺の鐘の声や三更の時なれバ猶予なくぞと立よりて彼の金銀
是までとさゝめ手ばやく躯を菖蒲にかくし泣伏妻を引起し泣て居る処に
あふぎ此金持て裏道より彼の巻物を買取来れ娘ハ今宵生別なるべ
しもあるまじとおしやりとて鮮血たゞる首たづさへ妻人をひきたてつ。
奈ぶその紙门とたてきりてその後音もなかりけり約束の時刻ぞ
と黒星眼平手の者をおして来るやまくなむ右衛門若君の首討ちいふに
くとより一間のうちよりかむ右衛門首桶をたづさへて打来りて
め出し老命まじめなくい首打にとむなくに清点検と
そーいふぜハ眼平いそく其月若ぎの死よくぞ知りたる事へかへぞ知らう

なんぢなればも假首ハワるとほしめし又まことはしものうらべ忽なんぢが
のうくるあとぞゝ。首桶を引よせて巳に蓋をとらんとせしとかむ右衛
门ハ若假首とみめかさべきり死をとくび覚悟して袖の下に刀を抜かけ。
めくぞをのぞひとへげに危くぞふえたりける眼平蓋をとりのけて是
ハとおどろく体なりしが。文弥が首の口中より陰気を吐とかむ右衛門が月に
のミえしが。眼平忽眼くらミも月若ぎのかん首に相違なしとよくお
ほゝぞと賞美して首桶をとりおさめ従者をちらばせそれまでの人
数とぞくひつとせしと下知をなしふるびかむ右衛門にむかひ若君の首
討たるハ汝にかのそれのほか旧悪の罪あれども此度の功により大赦の
御前よりゆるされしと宣ひ捨て人数を引つれ立帰る。かむ右
衛門ためいきと吻と胸なでておくれまじりの人数を引へさせやと気づく事ぞ

若君はなほしまみゝとなく交せどやとゝひて立よる折〳〵も妻のそ菜息も
ほそくあへぎたをたゞゆれば文弥が一念頭ふるまとなり。
陰気と吐て眼平が眼をくゝませ十分に欺きとゝてのそ菜心かち
ほれ。かの巻物とゝろと出してわたせば。むむ右衛門ひらけそお家の重
宝ぞ。まだれをしこて巻おさめ。これさへのれべそれがじが汚なる名はそき。
末代までもきよめ。これとゝくも楓が孝心ふる古ぞ。娘はもとや旅
立〳〵。のゝ不便やさぞ嘆しかん今ゝべ。のれは楓ところづけしも。のへで
へ墓手の畧訓ぞ。小蛇のたゝる前表ぞん文弥が初名は栗太郎と名づけも。
丹波の国の爺打栗爺ぞ打る〳〵因縁ゝ只此ゝへ文弥ぞ。菩提とゝへが
肝要なり。眼平一応假首とゝろとゝへが。今ぞそれとあらはれて。ふゝ火
こゝふ〳〵を来〳〵んへ必定なり。片時もとゝ若君はかとしゃをふゝ

いひて奥ぞへ入月若の手はたゞさて立のゞれば若君へ目は泣ぬ。
夫婦の忠節過分なり。便りは文弥が身のくそやとなげき
のゝ多〳〵一言が。去ぞあるときの千石〳〵。夫婦が身ぞへあり〳〵。
ぞむ右衛門巻物と懐中〳〵。躯とられなる菖蒲と呼ひ若
君のぞん手はられば妻のそ菜は琵琶とゝられ地水火風の四ツ
の緒のきれ〳〵我子のゝ〳〵ぞと。轉手撥面半月の月の光りを
たゝとみて播磨のゝ〳〵ぞなりぬれば
○のゝて。ぞむ右衛門夫婦。若君は枝て。播磨〳〵河内ぞ〳〵。
取縁の寺にたゝて。文弥が躯と畑とぞ〳〵。のゝ琵琶
と施物ゝ〳〵て。仏支とゝ〳〵若君ぞそ菜はつけて。かの寺
に忍ばせぬ。その外はかの巻物はたゞさへ。桂之助銀杏

前の。ひくへ成たるつゝ。ふらそでなるそ

卷之三終

帝国図書館蔵